

朝鮮大学校認可問題

—「北の工作員」養成基地—

「朝鮮大学校」の存続は許せない！

元朝鮮総連活動家 卓 賛浩

わたしは、東京武蔵野にある「朝鮮大学校」を卒業し、二〇数年朝鮮学校の教員、そして総連の専従活動家であった。祖国と民族に背いて生きた自らの罪を悔いつつ、ここに総連と朝鮮大学の犯罪を告発・糾弾する。

「朝鮮大学校」存在の是非をただす

教育（学校）が、必要ないと主張することはとんでもない話だ。しかし、どうだろう。はたして「朝鮮大学校」が、在日同胞と日本国民にとって存在価値のある大学であろうか？ 大学教育と言える大学であろうか？

今こそ、朝大の存在を問いたです時ではなからうか！朝鮮大学校のホームページ、「学長のあいさつ」を見ると、「本学」の教育目的は、複雑で価値観の多様な日本社会において、学生たちを朝鮮人としての確固とした民

族自主精神と創造的能力を備えた、祖国と民族を愛する有能な人材を育成することにあります」とある。

朝大の卒業生からすると、「なにに？これが朝大の教育目的だ？」と、驚くばかりだ。かつてわれわれが、毎日のように吹き込まれた大学の教育目的と使命は、そんなものではなかった。これは、いつものようにその正体を隠すための対外向けのプロバガンダなのだ。

では、仮面でないその正体とは？

総連の責任副議長・許宗萬は朝大評議会（二〇〇年十二月）を指導し、次のように強調したという。「敬愛する金正日將軍様は『朝鮮大学は学生を政治思想的にしっかりと準備させ、チュチェ（主体）の世界観、首領観、民族観を人生観化した革命家、青年中核を育てるべきだ』とおっしゃった。朝大は本質において在日朝鮮人

運動の代、愛国の代を継ぐチュチェ型の青年中核を育てる源泉地である」。

これが本音であり、現在も朝大教育の目的は、金日成と金正日、そして三代目・金正恩に忠誠をつくす「革命家」「工作員」を養成するところにある。

ゆえに、北朝鮮の軍事独裁者たちは、朝鮮大学を「我が国唯一の海外国立大学であり、偉大な金日成大元帥の大学である」と、公言してはばからない。

民族教育の最高学府である「朝鮮大学校」が、金日成・金正日・金正恩の「赤子」を養成することにあるのだから、初・中・高級学校等の朝鮮学校がどのような教育を実施しているかは語るに及ばない。

北朝鮮の軍事独裁政権の混迷と暴走、その忠実な下請け組織である総連からの会員離脱がすみ、朝大と朝鮮学校の学生数は年々減少するばかりである。

そのピーク時には、一五〇〇名以上いた朝大は、いまや六〇〇名前後に急減し、初・中・高生は五〇〇〇名台になってしまったが、教育の内容にはなんの変化もない。むしろ孤立と衰退が激しいほど仮面は微笑み、金三代王朝への「忠誠心教育」はより巧妙陰湿に進行されている。

「朝鮮大学校」の沿革。そして、その生みの親は？

一九四五年八月十五日―祖国解放後の、在日同胞の子弟教育は「朝鮮語講習所」から始まった。一九四六年当時の朝鮮人初等学校は、五〇〇余校、生徒数五万余千名にのぼった。教科書も自主的に編纂したまさに手づくりの民族教育であった。だがそれは決して順風満帆なものではなかった。

その後の祖国は分断の固定化、大韓民国の建国（一九四八年八月）、そして北朝鮮による朝鮮戦争（一九五〇年）の勃発へと続く激動期を迎える。一九四八―九年、GHQによる朝鮮学校の強制閉鎖は民族教育の一大試練の時期でもあった。

一九四五年―五〇年ごろまでの朝鮮学校は、朝鮮人運動が左翼主義の思想的影響を強くうけてはいたものの、子どもたちが祖国に帰っても不自由のない、母国語を中心とした民族的素養をたかめる教育であったと言える。

トタン屋根の校舎でなんの設備もない学校。にわか仕込みのたどたどしい先生たちではあったが、そこには解放された民族の燃えたぎるような民族愛と、明るい子どもたちの笑顔があった。

「朝鮮大学校」の存続は許せない！

膨大な犠牲と恨を残したまま一九五三年朝鮮戦争は休戦。その後の在日の民族運動は分裂と対立を繰り返した。一九五五年五月、金日成は韓徳銖をけしかけ朝鮮総連を結成し、民族教育までもその手中におさめた。それでも朝鮮総連の出現する一九五五年ごろまでは、百数十校に二万名近い生徒が学んでいた。

さて、前述の朝大ホームページには、「本学は朝鮮総連が結成された翌年の一九五六年四月十日に創立した」とある。それは東京朝鮮中高級学校の校舎の一隅からの二年制大学、学生数六〇余名での開校であった。続いて「一九六七年金日成主席から送られてきた第二次教育援助費が本学の校舎建築にあてられた」とある。現在の東京都小平市のキャンパスである。

最近暴かれた話だが、この建設資金（ドルを香港でポンドに替えた現金）を、日本人の弁護士であり当時社会党の衆議院議員だった古屋貞雄氏が、ピョンヤンで金日成に直接頼まれ、体に巻いてきて総連の韓徳銖に渡したとのことだ。すると、間違いなく朝大の生みの親は金日成である。金日成がオーナーであるから総連はこの恩義に報い忠誠をつくすほかない。

開校から二〇〇四年までの朝大の沿革史をみると、五

ら、各種学校として朝鮮大学の認可を獲得した。総連のホームページは、「在日同胞は総連の指導のもと、一九六八年四月朝鮮大学校が、そして一九七五年一月までにすべての学校が学校法人認可を獲得し、民族教育の合法性を強固にした」とある。まさしく総連が指導したと書いている。このようにして朝鮮学校の仮面の部分はととのっていったと言える。

東京都都議会議員・野田数氏^{かず}は、この度の朝鮮大学校への補助金問題で都議会の質問にたち石原知事から廃止を引き出した。しかし、「朝鮮高校無償化」に反対する自民党の議員までもが、日帝植民地支配への善意の贖罪意識からであろうか、はたまた総連の献金工作に汚されているのか、しり込みして動かなかったと言うのだ。そして、「朝鮮学校はまるで聖域」だと激怒している。

東京都は朝大を認可しているが、今後、「調査の結果は違法であるから取り消す」との英断を都知事がおろしでもするならば、総連は狂わんがばかりの反対運動を展開すること間違いなし。なぜなら朝鮮大学校と朝鮮学校は、即、朝鮮総連であり、朝鮮大学校の認可取り消しは総連の消滅を意味するからである。

もしも、恐怖の独裁者・スターリンの諜報部隊養成学

○項目中二〇余項目が、金日成と金正日の暖かいご配慮と贈り物のオンパレードである。学長の韓徳銖総連議長が労働英雄称号や勲章を授与した、多くの教員が共和国教授・副教授の学職をうけた。民族楽器や魚類標本を贈ってもらった、学長が接見を受け修学旅行の学生たちが最上の待遇をうけたといった具合である。これはもう大学の沿革史ではない。現人神・金親子からのありがたい施しの記録だけを綴った紙きれでしかない。

このように「朝鮮大学校」は、北朝鮮直属の総連の大学である。在日同胞子弟の大学でもなく民主的民族教育でもない。日本国民から支持される大学でもない。

朝大は東京都が認可する「各種学校」

善良な日本市民は、総じて教育―学校に対して理解度が高く寛容である。これは総連の民族教育の仮面（カムフラージュ）の部分にとつては、じつに都合なものである。そして、これが総連や朝鮮学校をささえる。総連は、この一部日本人（政治家をはじめ各界各層の総連シンパ）、いわゆる支援者（団体）を前面にだしての世論作りと、要請運動を展開し巧妙に利用している。

そして一九六八年、総連は当時の美濃部亮吉都知事か

校が、そしてテロ集団・アルカイダの自爆戦士訓練学校が、東京の武蔵野にあるとしたら、「いいではないか学校だから」「都が認可しているから心配ないさ」と、見過すだろうか！

先のホームページには、「朝鮮大学校は共和国の権威ある海外大学であり、民族教育の最高学府である。海外僑胞教育の歴史上、一つの海外同胞組織が大学を創立している例は朝鮮総連以外には見られない。朝鮮大学校は、総連と在日同胞が民族史に誇る財産であり、民族教育のシンボルとなっている」とあり、続けて、八つの学部と研究院（大学院）そして研究所を有し、総合大学的な体系と内容をととのえていると誇らしげに書いている。

また、一万三、七〇〇名（二〇〇五年三月現在）をかぞえる卒業生は、総連の各機関や同胞社会の柱としての役割をはたしているところである。（なぜか二〇〇五年以降の卒業生数は伏せている）

朝大は全寮制の学校で、現在、学部は政治経済学部、文学歴史学部、経営学部、外国学部、理工学部、教育学部、体育学部、短期学部の八学部がある。

一九六〇年代中ごろまでの朝大は間違った思想教育の場ではあったが、それでも学生たちは、おおいに語り青

春を謳歌する同胞青年の「学び舎」であったといえよう。

金日成絶対化教育—これはもう民族教育ではない

では、いつごろから朝大は金日成に完全に掌握されたのだろうか。

一九六七年の朝鮮労働党中央委員会第四期第一五次全員会議と、それに続く一六次会議は「首領による唯一領導」を打ち出した。すると総連第八回大会は「金日成絶対化」を叫び、教育現場にもその狂風が吹きあれた。そして学校の教育内容は一変した。

教科書はいっせいに金日成をあがめ礼讃するものとなった。大学はもとより、すべての朝鮮学校の必須科目は「金日成革命活動歴史」となった。

学校の歴史研究室から、乙支文徳、李舜臣などの偉人の肖像画はおろされ、まるで神殿のような「金日成元帥革命歴史研究室」が、朝大は言うにおよばずすべての朝鮮学校に出現していった（さすがに現在は運営していない）。子どもたちの学校生活は、金日成親子をたたえ崇める歌からはじまる。幼い子どもたちに「金日成の幼いころの歴史」を暗唱させ、教室に掲げた金日成親子の肖像画を毎朝ふき清めることを強要した。これはもう「カ

「熱誠班」（より過激な思想注入と空手の鍛錬を組み合わせた非公然組織）に網羅させる。たとえば、日本の高等学校の全生徒が、強制的にある青年政治団体に加入。政治活動を行うとする。こんな事が許されるだろうか？

朝大では、「特別給費生（特待生）組織」が、その後は、より過激な秘密中核組織がつくられていた。このような学生が卒業後、北朝鮮の「対南工作員」「スパイ」として韓国に潜入したり、「補助工作員」として日本人拉致に直接手をくだした。

一九七〇～八〇年代、わたしの同窓生や先輩たちのなかで、このような「対南工作員」裏の仕事」にかかわり消えていった人や行方不明者は一人や二人ではない。また、教員時代と総連の専任活動の時代にも、多くの同窓生や友人が「裏の仕事」に関係し、人生を棒にふるってしまった。

工作員が英雄になり、産業スパイが

「共和国博士」になる大学

朝鮮総連指導部と一般の総連同胞は区別してとらえるべきであって、これを混同してはならない。ここで言う「朝鮮総連」とは北の僕として、その秘密指令を遂行す

ルト教団」であり、狂気の世界であった。もちろん朝大をはじめすべての朝鮮学校の教科書は、当初から北朝鮮の課報工作機関が検閲し、彼らが最終的に決めたものが使われてきた。そしてそれは今も変わらない。

すでに日本語に翻訳された朝鮮高校の教科書・「現代朝鮮歴史」をみて、多くの日本人が「これは許せない」と抗議の声をあげている。朝大の教科書が検閲されるなら、その思想教育の内容たるや一目瞭然。誰が、「朝鮮大学校」の存続を許すであろうか！

先だって東京都の石原慎太郎知事は、朝鮮学校への補助金を廃止し、日本政府の「朝鮮高校無償化」を批判したばかりか、その違法性を徹底調査することを明言している。当然、朝鮮大学は厳しく調査・検閲しメスを入れなくてはならない。それが心ある在日同胞と、東京都民、いや日本国民の一致した要求であるのだ。

それだけではない。朝鮮大学の思想教育のもう一つの柱は、教科内容にもまして課外における政治実践教育の中身である。

朝鮮学校では、高校からは総連傘下の政治団体である「在日本朝鮮青年同盟」に全員が加入する。そのなかから、総連の幹部子弟や忠誠心の高い学生を選びだし、

る総連の指導部のことをいう。

総連は、表面上は在日同胞の権利を擁護し、日本との友好親善につくす団体だと標榜しているが、それは仮面にすぎない。その目的は、対韓非合法工作（対南工作）であり韓国の赤化統一にある。

ゆえに、総連の犯してきた犯罪とは、日本人拉致であり日本への非合法活動、課報活動である。彼らは人殺しの片棒すら喜んで担ぐ。在日同胞を「帰国事業」との名のもとに集団拉致（略奪）した犯罪。朝鮮大学の学生二〇〇名を金日成の還暦の宴に生け贄として献上。朝大生を「対南工作員」や「補助工作員」として投入。朝鮮信用組合（朝銀）を食いつぶし、商工人からの献金、収奪。学校を売り払っての莫大な献金は核開発と独裁政権延命のための金に化けた。とうてい許せない反逆・犯罪行為である。このような朝鮮総連に直属する「朝鮮大学校」は、幹部養成の役割を果たすだけでなく、その先頭を走る突撃部隊でもある。

金日成は生前、訪ねてきた朝大生の前で、こんな生々しい教示（お言葉）をたれている。「そこ（日本）は敵地だ。君たちはスイカのような革命家になれ！」と。これは、皮は青いが中身は真っ赤なスイカのような人になれ

と言う話である。朝鮮総連の各種イベントはもとより、総連機関への強制捜査時には私服に着がえて、その先頭にたつ「組織防衛隊」として非合法すれすれの「活動」に動員されてきた。

朝大の理系学部教員等は全員が「在日本朝鮮人科学技術協会」の会員である。また多くの卒業生も会員として名を連ねている。科協は、北の長距離弾道ミサイルと核開発に直接手を染めている。科学技術情報やロケットに転用できる機器・機材を、北へ運んだ。このような産業スパイまがいの「功績」がかわれ、論文も書かずして「共和国博士」の称号を頂戴している教員がいたりする。これはスパイに博士号をあたえたということになる。

何よりも、朝大の人事権は完全に朝鮮総連が掌握している。朝大の学位学職、教員の称号などはすべて北朝鮮政府が授与する。初・中・高の教員は、そのほとんどが教育部（師範教育部）の卒業生であるが、他の学部生も卒業資格、即、教員資格が与えられる。もちろん日本政府の教員免許をもつ朝鮮学校の教員は皆無といえよう。

総連の中央上位幹部のほとんどが朝大の卒業生であり、許宗萬副議長も元朝鮮学校教員出身である。わたしがそうであったように、突然、教員が専任活動家になる、そ

と、国際的諸条約を勘案して適用を決定する。

ましてや、金正日は多くの日本人を拉致した。当の金正日本人が認めたにもかかわらず、朝鮮高級学校の教科書は、いまでも「日本政府は拉致問題を極大化し、反共和国、反総連、反朝鮮人騒動を大々的に繰り広げている」と教えている。だからして日本の多くの国民が、「朝高無償化」に反対し朝鮮大学の存在に異議をとなえているのだ。これは、主権国家としてまったく当然なことであり、制裁を加えている国・北朝鮮の大学や学校を無条件に認めるはずがないのだ。

今年に入ると、東京都は朝鮮学校への補助を廃止した。そして大阪府は、「不法国家の北朝鮮と結びついている朝鮮総連と関係がある朝鮮学校に金は出せない」として、府下の朝鮮学校へ出していた年間一億円をこす補助金を見送った。

一部では、これを民族差別であり、子どもたちの「学ぶ権利」の侵害だと言っているそうだが、これは間の抜けたはなしである。子どもの権利は、あくまでも子どもに与えられる権利であって、間違った「朝鮮学校」に、ましてや「朝鮮総連」に与えられる権利ではない。

また、朝鮮学校を支援する一部の日本人や団体も、朝

してその逆も普通のはなしである。

総連の議長・韓徳銖が、一九五六年から死亡するまで学長を兼任した。かれは、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議の代議員であり、いまの学長・張炳泰も代議員である。すなわち北朝鮮の国会議員だと言うことだ。

「朝鮮大学校」の認可は、いまずぐ取り消すべきだ！

総連は、在日同胞は日本の植民地時代から日本に住んでいる「特別永住者」だから、民族教育の権利保障は当然だと主張し、日本社会の支持・同情を得ようとしてきた。そして、総連の学校教育をマイノリティの民族教育だと声を大にしてきた。

一九五〇年半ばにも、在日子弟の教育を民族性の継承にあると考え、日本の法律に適応した第一条校として発展させることを主張した総連の先たちたちがいた。しかし総連は、独裁政権追随教育と反日教育が規制されることを嫌い、この主張を受け入れなかった。

ところが今は、外国人学校の規範のなかで、「民族教育・総連教育」を認めよ、「高校無償化」も適用せよと要求している。朝鮮学校に外国人学校の規範が適用されるとすると、当然ことだが日本政府は、北との外交関係

鮮学校の保護と「学ぶ権利」を混乱してとらまえているとしか思われない。比較的大きな中級学校では、朝鮮学校の教育に見切りをつけ、毎年数十名の生徒が日本学校や民団学園に転校するという。しかるに朝鮮学校では、このような子どもたちの「学ぶ権利」を侵害し、「裏切り者」「民族反逆者」などと罵り精神的リンチを繰り返している。なんと一〇数年前までは、校長が転校証明すら出さなかった。これは、間違いなく学ぶ権利の侵害である。

「朝鮮大学校」は、総連が完全に牛耳っている

表向き学校を設置・運営する学校法人理事会はまったくの傀儡で、実態は朝鮮総連と学校が一体化し総連が学校を支配している。

総連中央は多くの学校用地や建物を勝手に担保にいれて北への「献金」を捻出した。朝大の第二グラウンドも、とくにRCC（整理回収機構）に債権として押さえられていた。また、全国七〇余校の朝鮮学校で、まともな校地や校舎は一校もないと言っても過言ではない。

学校の運営は学校定款（寄付行為）にしたがって運営されていない。学園理事会はまったくのカガシにすぎな

い。実質、朝大は総連中央本部が、他の都内朝鮮学校は総連東京本部が掌握している。教員に対する人事権や教育会（表向きは学園理事会）職員の人事権も完全に総連が握っている。これは間違いなく法律に違反している。これだけでも、各種学校の認可取り消しに値する。

自治体補助金の二重取りがあったりで、該当する自治体機関の朝鮮学校への調査点検はまったくの形式にすぎないようである。いまだ補助金を出している自治体は、抜本的に検討し見直すべきだ。

総連は日本の反動政府の干渉を嫌い、北一辺倒の教育がやりたくて、当初から日本の教育法を否定した「民族教育」を実施してきた。しかるに学校運営がむづかしくなると、教育内容やカリキュラムに抵触しない程度の各種学校の認可を要求していった。

保護者の総連離れと学生数の減少から、学校運営は深刻な事態におちいった。すると、今度は恥も外聞もなげ捨て、当局からの補助金をねだりはじめた。そこへ「高校授業料無償化を勝ち取れ」との、金正日の「マルスム」（お言葉）が下達された。

「無償化問題がうまくいったら、次は朝大が私立大学助成金を獲る番だ」と総連は皮算用。につこり微笑んで

去る二月十三日、民団は「朝高授業料無償化」問題について、「朝鮮高校は、その運営と内容が、総連の指導のもと北のコントロール下にあり、支援金はイコール総連の支援につながる恐れがあるので慎重に対処されたし」との申し入れ書を、文部科学大臣に出している。この事実が、民団同胞の意思をよく表わしていると言えよう。

次に、朝大卒業生の進路であるが、卒業生は、朝鮮総連活動家（職員）、朝鮮学校の教員や同胞企業へ就職する。しかし、総連組織の衰退と学校数の減少で教員がふれる状態がつづき、職につけず家業を継ぐとかアルバイトで生計をたてているという。

バブル全盛期時代、総連（許宗萬）は、不動産業とともにパチンコ産業に手をだし多い時には五〇余店舗、そのなかには朝大が経営する数店のパチンコ店もあった。なんと総連は、優秀な卒業生をパチンコ店に投入したのであった。その親たちは、「俺はパチンコ屋の店員にさせるために息子を朝大にやったわけじゃない」と憤慨したとの話が、同胞社会で話題になったものだ。

このパチンコ店の責任者をしている後輩に、ある酒席であった。彼は、「はじめのころの学生たちは、「思想性」が高く使命感にもえていたが、最近の学生はじつにドラ

いたという。しかし、思うようにはならず、逆に朝鮮学校の正体が暴かれ、自治体からの補助金すら、「出る」「出ない」と大騒ぎになった。まったくのヤブヘビである。

いま、拉致被害者家族会、救う会、本誌を発行している守る会をはじめとする広範な日本国民は、「朝鮮高校無償化」と、自治体補助金の全廃、朝大と各級朝鮮学校の法人認可の取り消しを要求して果敢にたたかっている。

北と総連は、朝大を幹部養成の「源泉地」という。その「水源地」を枯渇させ朝大の横暴をストップさせなくてはならない。

朝大教育の現状は深刻だ

総連同胞社会での一九八〇年ごろまでの朝大は、それでも人気のある存在であったといえよう。総連同胞は、息子や娘を朝大にやっていることを自慢していた。

しかし、いまの朝大に当時の面影はない。在日の大多数を占める民団同胞は、民団系の学校を民族教育と呼ぶが、総連の「朝鮮学校」を民族教育として認めない。そして、総連の学校を「ベルゲイ（赤）の学校」とよぶ。朝大は「スルテオムヌン（役に立たない）幹部養成大学」と呼び、その正体を見透かしているのだ。

イで、使いみちにならない」。続けて「金日成主席は、スイカのような革命家を養成せよと言われたが、外だけが赤く中は白いリングばかりでどうしようもない」とばやいていた。とにかく、いまごろの朝大の「忠誠心教育」は、彼らの意図するようにはすまない。ピョンヤンへの修学旅行をボイコットする学生もいるという。

学生数は年々減少するばかりか学校運営もままならない。朝大の学生数はなかなかわからない。総連の機関紙「朝鮮新報」の今春の入学式の記事には、新入生の数は報道されていない。入学式に参加したある友人は、「入学生はたったの一六〇人で、今年もまた学生数が減ったそうだ。寄宿舎はガラガだったよ」と、はなしていた。

現在の学生のほとんどは総連幹部の子弟である。一部同胞は、民族の言葉や文字、歴史、文化を学ぶ場がないので、次善策として朝大を選んでいくだけだ。決して教育内容を支持しているわけでもなく、総連を支持しているからでもない。

一二年も前、許宗萬副議長は朝大の評議会で、「大学の学生数を確保する対策を立てよ」とハッパをかけているのを見ると、すでに数年も前から学生数減少の傾向に歯止めをかけることができない「深刻な事態」に陥って

いるのだ。

しかし、今日この時点にあっても、「革命戦士」の養成に余念がないのも事実である。朝鮮労働党・金正恩第一書記に忠誠を誓う「中核」が準備されつつづけていることを、わたしたちは忘れてはない。

十数年前、元朝鮮大学の副学長であり、総連のチュチェ思想研究・普及の第一人者だと言われていた朴鋪坤先生が、NHKのテレビに出演し金日成に二〇〇名もの学生を奴隷・生贄のようにして差し出したことを悔い、沈痛なおもいで転向意思を表明された。

わたしは胸つまるおもいで先生の告白を聞いた。そして自らの思想転換への決断と励ましをいただいた。そのころ、多くの同窓たちが総連から離脱していった。

民族教育の現状を打破しようと、一九九八年十二月、総連活動家や教員、商人の有志は、具体的な改善提案を総連中央に突きつけた。このような動きは二〇〇二年の朝日首脳会談での「金正日の拉致謝罪」以降、大きなうねりとなって根気よく続いている。

総連は、学校を総連運動の生命線として位置づけ、学

生数の減少をくい止めようとして躍起だ。また、朝大の活性化に力を傾けている。しかし、それは無理な話である。

三代にわたる金王朝の忠実なシモベにすぎない総連中央執行部に、同胞の真実の声が、子どもたちの願いが汲みとれるわけがない。

今こそ、わたしたちは総連をぶっ潰し、ウリ（私たちの）学校を同胞の手に取り戻さなくてはならない。在日同胞子弟の教育は、一言で言うならば民族文化継承のための教育である。同胞が自主的に管理・運営する自由で民主的な教育であり、日本の教育法に立脚した国際社会の平和に寄与する教育でなければならないと考える。

在日同胞は十分な叡智と経験、優秀な人材をもっている。わたしたちが本場の民族教育を押しすすめるならば、必ずや善良な日本国民はここからの支持・支援を惜しまないであろう。わたしはそう確信してやまない。



朝鮮大学校認可問題

美濃部亮吉「都知事12年」と朝鮮大学認可

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会 副代表

三浦 小太郎

美濃部 対 石原の都知事選

「ファシズム石原」、「社の被害者美濃部」

のイメージ選挙

石原慎太郎東京都知事は、二〇一二年三月八日。救う会西岡力会長、家族会会長飯塚繁雄氏、事務局長増元照明氏らと会見した。主たるテーマはもちろん拉致問題だが、そこで西岡氏が、美濃部亮吉都政下で朝鮮大学校を各種学校として認可した対応を見直すよう求めたのに対し、石原知事は、経緯を改めて調査する意向を示したと報じられている（「産経新聞」報道から）。

この記事を読んで私が真っ先に思い出したのが、美濃部都知事の三選出馬に石原慎太郎候補が挑戦した一九七

五年の都知事選だった（この選挙を石原陣営の側からみごとにドキュメントとして描いたのが沢木耕太郎の『馬車は走る』（文春文庫）に収録された「シジフォスの四十日」であるが、これは私の知るかぎりもっともすぐれた石原論であると思う）。

この選挙の直前、美濃部亮吉都知事は、社会党・共産党の両党共闘が困難になったとして一時は出馬を辞退する方向に動いていた。美濃部は自著『都知事12年』（朝日新聞社）のなかでこう記している（本稿では、特に記さないかぎり美濃部の発言、文章はこの本による）。

「三度目の選挙を目前にした（昭和）五十年二月十六日の朝、私は自らの進退を相談するため、都政調査会常務理事の小森武君といっしょに鎌倉の大内（兵衛）先生を訪ねた」「同和行政問題を打開する道をついに開けず、